

探究と留学に関する夏季オンライン特別講演

—コロナ禍の高校生を応援するための取り組み—

板倉 孝信, 岡村 郁子, 河西 奈保子 (東京都立大学)

東京都立大学アドミッションセンター高大連携室では、高校生応援プログラムの一環として、2021年7月24日・8月22日に夏季オンライン特別講演を開催し、高校生の探究学習と海外留学への意識向上を図った。コロナ禍にあるため、フィールドワークや情報収集に困難を抱える高校生に対して、探究学習や海外留学に関する大学の様々な知見やノウハウをオンラインで提供することで、高校生の興味や関心を引き出すことを目的とした。本講演は海外留学に関して本学国際センターの協力を得ることで、多くの参加者を集めることに成功し、高大連携活動として意義深い試みとなったが、同時に課題もいくつか残ったため、本稿ではそれらを広く共有する。

キーワード：高大連携、探究学習、海外留学、オンライン講演、コロナ禍

1 はじめに

1.1 本稿の目的と意図

本稿では、東京都立大学アドミッションセンター高大連携室による高校生応援プログラムの一環として、2021年7月24日(土)・8月22日(日)に実施した、夏季オンライン特別講演を検討対象とする。本講演は、コロナ禍のためにフィールドワークや情報収集に困難を抱える高校生に対して、探究学習と海外留学への意識向上を図ることを主眼としたイベントである。本学の入試課や高大連携室は、これまで出張講義(一部)、先端研究フォーラム(近世日本史・作業療法学)、高大連携ゼミ・集中ゼミ(政治学)、大学院生による個別相談(大学生生活・勉強方法)などの高大連携活動を、オンライン方式で実施してきた。特に本講演は、2021年度に対面方式で実施できなかったオープンキャンパスの代替措置として高大連携室で企画された、高校生応援プログラムの主要イベントに位置付けられる。後述のように、本講演は多くの成果を挙げたものの、今後に積み残した課題も存在するため、本稿ではそれらを広く共有することで、将来的な高大連携活動の発展の一助としたい。

1.2 先行研究との関係性

本講演は、大学入試を基軸として高校教育と大学教育の架橋を試みる高大接続としての要素も含んでいるものの、多くは個別科目に依らない高大連携としての色彩の濃い内容となっている。一般的な高大連携活動は、特定分野に関する模擬授業や教員研修などを通じて実施されるものが多いが、本講演は進路選択やキャ

リアアップに注目することで、より広い視野から高大連携を試みた点に特徴があると言える。

1998年の大学審議会答申¹⁾と翌99年の中央教育審議会答申²⁾以来、20年以上にわたり高大連携活動は発展を続けており、その範囲は広く多岐にわたっている(勝野, 2004; 高崎経済大学産業研究所編, 2013)。その一方で、2018年度以降の18歳人口の減少加速や、2022年度以降の「総合的な探究の時間」の必修化により、従来の高大連携活動は岐路に差し掛かり、新たな局面を迎えつつある。近年では高校での出張講義や大学での体験学習にとどまらず、科目の垣根を越えた探究活動・キャリア支援が必要な状況が生じており、本講演はその潮流を踏まえたものである。

過去の大学入試研究ジャーナルを見ると、高大連携活動を直接的に検討対象としている論稿は、比較的近年のものが多い傾向にある。それらは、①高大接続を踏まえた入試制度や教育プログラムとして高大連携を応用した事例(永田ほか, 2015; 西郡ほか, 2018; 大久保, 2021)と、②高大連携活動の実施報告から、その役割と効果を検証した事例(前川, 2019; 大野ほか, 2021)に大別できる。本稿は上記の②に該当するが、コロナ禍における完全オンライン方式での試みとして、また高校生の主体性醸成を目的とするインタラクティブなイベントとして、従来の活動や論稿とは異なる位置付けを持つと考えている。

また上記の高大連携活動とは別に、入試広報事業をオンライン実施した事例に関する論稿も、近年に多数発表されている。特に③東北大学による論稿が最も多く発表されているが(倉元ほか, 2020; 久保ほか,

2021a; 久保ほか, 2021b; 久保・宮本, 2021), ④静岡・信州・広島・新潟の地方国立大学による事例紹介も見られる(雨森, 2022; 一之瀬ほか, 2022; 永田ほか, 2022; 吉田ほか, 2022)。特に④では各大学の入試広報に関して, そのラインナップを挙げながら包括的な分析を試みており, そこからはオンライン実施の効果を総合的に測定しようという意図が窺える。それに対して, ③は高校教員向け入試説明会や高校生向け個別相談会の実施報告に特化し, その実践と課題を分析しているものも含まれている。本稿は③の実施報告と同様のアプローチを採用しつつも, 入試広報ではなく, これまであまり扱われてこなかった, 高大連携イベントのオンライン実施報告を試みる。

1.3 次節以降の記述方針

本講演は, 2021年7月24日と8月22日の午前・午後, それぞれ①探究学習編と②海外留学編(詳細は次節以降で説明)を実施しており, 基本的なコンテンツは両日ともに同一である³⁾。しかし両者で講演者が一部異なる場合があり, また学生による研究・留学紹介やフリートークの内容も異なるため, 詳細な部分には相違が見られる。これらを踏まえ, 以下の第2~5節においては, あえて日付を区別する必要がある場合のみ, 両日を区別することとする。

第2節では特別講演の概要と背景, 第3節ではプログラム①「大学進学を考える高校生へ~探究学習編~」, 第4節ではプログラム②「大学進学を考える高校生へ~海外留学編~」, 第5節では特別講演の意義と課題をそれぞれ扱う。特に第3・4節のプログラムに関する説明では, 7月24日の内容を基本として記述し, 相違する部分のみ8月22日の内容を追記するという形式を採用する。

2 特別講演の概要と背景

2.1 特別講演のコンテンツ・実施方式

プログラム①(探究学習編)とプログラム②(海外留学編)のコンテンツは, 以下の表1・2の通りである。尚, 両プログラム共通のA「大学での学びと高校生活・進路選択」は, 同内容である。本講演の実施時期である2021年夏季は, 新型コロナウイルス感染症の感染拡大期(第5波)に該当したため, Zoom Webinarを用いた全面オンライン方式による開催を選択した⁴⁾。配信会場としては, 東京都立大学南大沢キャンパスのプレミアムカレッジ専用ラウンジ(2号館)を利用し, 参集した講演者・フリートーク参加者などは, 感染拡大防止への配慮を徹底した。

表1 プログラム①(探究学習編)のコンテンツ

①A大学での学びと高校生活・進路選択=河西奈保子(大学教育センター教授/高大連携室長)
①B探究学習の意義と発信力=板倉孝信(大学教育センター准教授)
①C高大連携室の大学院生スタッフ ⁵⁾ による研究紹介
①Dフリートーク(+Q&Aの質問への回答)

表2 プログラム②(海外留学編)のコンテンツ

②A大学での学びと高校生活・進路選択=河西奈保子(大学教育センター教授/高大連携室長)
②B大学で留学をするために~高校での英語学習~=岡村郁子(国際センター教授) [7月24日]/大石敏也(国際センター特任助教) [8月22日]
②C留学促進チームの学生などによる留学体験の紹介
②Dフリートーク(+Q&Aの質問への回答)

2.2 特別講演の準備作業・システム

特別講演の準備作業については, 第1回開催日(7月24日)の2カ月前を目安として開始し, 1カ月前から本格的な段階に移行した。準備作業を分類すると, ①参加者間の意思疎通, ②日程・会場・機材・システムの確定・確保, ③参加者募集のための広報の3つに大別される。準備作業時期の目安については, 以下の表3にまとめたので, 参照されたい。

表3 特別講演の準備作業に関する日程表

2カ月前	国際センター(共催)への開催打診
1カ月前	日程・会場・内容の確定, Webinarの予約, ブログへの掲載, 協定校への周知
3週間前	高大連携室Twitter・HPでの告知
2週間前	リハーサル(機材・映像・音声確認), 講演者・パネリストの打ち合わせ
1週間前	大学公式Twitter・学外サイトでの告知 ⁶⁾

配信会場にパソコン4台, 別室に1台(PC①)を設置した上, 配信会場の1台(PC②)をホストに設定し, 高大連携室の大学院生スタッフ(運営担当)が管理した。このホストが, チャット(接続に関する質問)やQ&A(内容に関する質問)の取りまとめ, 時間管理を担当した。さらに配信会場の別の1台(PC③)を学生講演者の発表とフリートークの兼用として, 残り2台(PC④・⑤)を教員講演者2名の発表用とした。さらにフリートーク用として, 指向性カメラ・マイクを設置することで, パネリストが一定の距離を

置いて着席し、マスクを着けたままで会話できる環境を整備した。またインターネット回線としては、配信会場の学内 Wi-Fi を使用した。

2.3 特別講演の予約者数・参加者数

特別講演の各日程・プログラムにおける予約者数と参加者数、さらに参加者の学年内訳については、以下の表 4 に記した通りである。予約者数に対する参加者数は 70%程度であり、参加者の学年は 1・2 年で全体の 70%程度を占めている。海外留学より探究学習の方が、実際に多くの高校で取り組まれていて、高校生にとって身近なためか参加者数が多くなっている。また 7 月 24 日より 8 月 22 日の方が、告知から開催までに時間的な余裕があり、広報活動が十分にできたためか参加者数が多くなっている。

表 4 特別講演の予約者数・参加者数・参加者内訳

7/24 午前 探究学習編	予約者数：34 名，参加者数：26 名 高 1：高 2：高 3：他＝7：8：9：2
7/24 午後 海外留学編	予約者数：17 名，参加者数：13 名 高 1：高 2：高 3：他＝3：4：5：1
8/22 午前 海外留学編	予約者数：38 名，参加者数：22 名 高 1：高 2：高 3：他＝12：6：4：0
8/22 午後 探究学習編	予約者数：94 名，参加者数：67 名 高 1：高 2：高 3：他＝21：29：15：2
合計 のべ人数	予約者数：183 名，参加者数：128 名 高 1：高 2：高 3：他＝43：47：33：5

2.4 特別講演の事後アンケート結果の概要

特別講演の参加者を対象に実施した事後アンケート結果の概要は、以下の表 5 に記した通りである。詳細な分析については、5「特別講演の意義と課題」で後述するため、ここでは概要を提示するに留めておく。まずアンケート回収率が 50%に達しなかったことは反省すべき点であるが、東京都・神奈川県以外の参加者が 37.5%，大学ホームページ以外で講演開催を知った参加者が 30.4%と予想以上に多く、オンライン方式での実施や様々な方法での告知には、効果があったと考えられる。また今回講演への満足度や次回講演への参加希望度、大学に向けた学習意欲や進路意識の向上については、5 段階の 4 以上で 90%前後を占めており、参加者の好評を得たと言える。

表 5 特別講演の事後アンケート結果の概要

事後アンケートの回収率	回答：56 名 (43.8%) 未回答：72 名 (56.2%)
居住する都道府県	東京都・神奈川県：35 名 (62.5%) 上記以外：21 名 (37.5%)
講演開催情報の把握法	大学ホームページ：39 名 (69.6%) 上記以外：17 名 (30.4%)
今回講演への満足度	5 段階 4 以上：49 名 (87.5%) 上記以外：7 名 (12.5%)
次回講演への参加希望度	5 段階 4 以上：52 名 (92.8%) 上記以外：4 名 (7.2%)
大学に向けた学習意欲向上	5 段階 4 以上：48 名 (85.7%) 上記以外：8 名 (14.3%)
大学に向けた進路意識向上	5 段階 4 以上：50 名 (89.3%) 上記以外：6 名 (10.7%)

3 プログラム①「大学進学を考える高校生へ～探究学習編～」

3.1 大学での学びと高校生活・進路選択

この進路講演では、河西奈保子（大学教育センター）が、①現代社会の激変と課題発見・解決能力、②大学での主体的学習の重要性、③高校での過ごし方と進路選択、④探究学習の進め方について、20 分で説明した。この中で河西は、目まぐるしく変化する現代社会では、自ら課題を発見し解決する能力が必要であり、そうした主体性は高校や大学での能動的な学びから生じると強調した。さらに、高校時代の学習や進路選択はもちろん重要であるが、それ以外にも様々な経験を積むことで、主体性を育むことができれば、大学入学後にも大きな財産となると述べた。最後に、探究学習のテーマ設定や調査・分析の方法についても言及し、興味や関心を持つ対象から実現可能性のあるテーマを選択した上で、批判的視点や情熱を持って試行錯誤を繰り返すことの重要性を説いた。

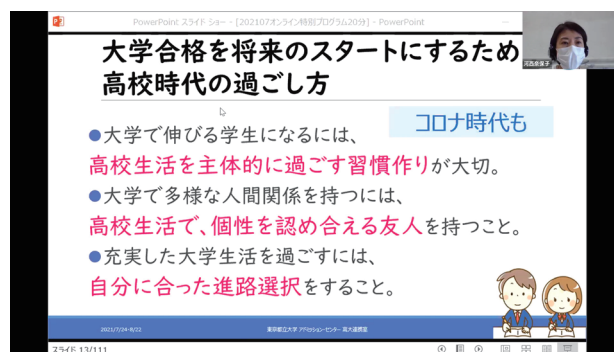


図 1 進路講演の様子（大学での学びと高校生活・進路選択）

3.2 探究学習の意義と発信力

この探究講演では、板倉孝信（大学教育センター）が、①探究学習の成立経緯と必要性、②探究学習の取組方法と留意点、③探究学習の意義と効果について、30分で説明した。この中で板倉は、高校の学習で陥りやすい一問一答型の無理やりな丸暗記から脱却し、主体的な思考法を身に付けるため、探究学習は有益であると指摘した。さらに探究学習を料理に例えるという新たな視点を提示し、④定番レシピからメニューを考え、⑤材料を集めて下ごしらえをし、⑥調理して盛り付けるといった手順を意識すると分かりやすいと述べた。最後に、探究学習は大学進学時の進路選択や、大学入学後のレポート・論文執筆にも役立つことに言及すると共に、探究学習で試行錯誤を繰り返すことは決して無駄ではなく、むしろ発信力を鍛えることが受信力の強化に繋がることを強調した。

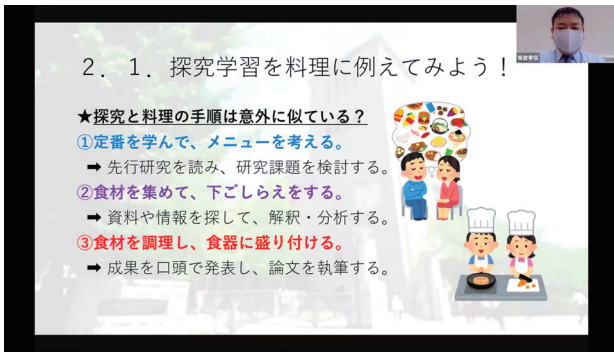


図2 探究講演の様子（探究学習の意義と発信力）

3.3 高大連携室の大学院生スタッフによる研究紹介

この研究紹介では、本学の機械システム工学域（システムデザイン研究科）修士2年、地理観光学域・観光科学域（都市環境科学研究科）修士1年の院生スタッフが、自身の研究を各10分で説明した。それぞれが簡単に自己紹介をした後、研究テーマを選択した経緯や研究活動に必要な心構えを中心に解説した。また研究活動に行き詰った際の対処法や研究対象への情熱の保ち方にも言及し、高校生の探究学習にも大いに参考になりそうな情報を提供した。特に高校時代のエピソードや得意・苦手科目、学部時代の過ごし方や印象に残った出来事にも触れていたため、参加した高校生にとっても親近感がわく内容であったと思われる。この研究紹介に関する質問は、次項で取り扱うフリートーク中のQ&Aでも寄せられており、年齢の近い先輩の体験談に対する関心の高さが窺える。

流体力学研究室を選んだ決め手



- ①ヨットから流体力学に一番興味を持った
- ②ファインバブル(後述)に魅力を感じた
- ③がっつり機械<適用範囲が広い研究

様々な授業を受けていく中で知識を増やした

図3 大学院生スタッフによる研究紹介の様子

3.4 フリートーク（+Q&Aの質問への回答）

このフリートークでは、Zoom WebinarのQ&A機能を利用し、参加者からその場で質問を受け付け、教員・院生スタッフのパネリストがそれに回答する形式を採用した。当初は質問が少数であった場合に備えて、トピックをいくつか用意していたが、実際には質問が想定以上に寄せられたため、質問への回答のみに集中した。参加者からの質問は、①院生スタッフの研究紹介に関するもの、②大学の講義や研究に関するもの、③探究テーマの決め方に関するもの、④探究学習の進め方に関するものが多くを占めた。まずファシリテーターが質問項目を読み上げ、適切なパネリストがそれに順次回答していく形式で、フリートークを進めていった。2回で合計23件の質問が出され、その全てに回答したため、20分の予定時間が30分程度まで延長されたが、非常に充実したやり取りが行われた。

4 プログラム②「大学進学を考える高校生へ～海外留学編～」

4.1 大学での学びと高校生活・進路選択

前述のように、この進路講演についてはプログラム①と同一であるため、本項での説明は割愛する。

4.2 大学で留学をするために～高校での英語学習～

この留学講演では、岡村郁子・大石敏也（国際センター）が、①本学の留学制度の紹介、②留学に必要な準備と英語力、③英語の効果的な学習方法、④本学の国際副専攻コースの紹介について、30分で説明した。この中で両者は、国内での留学生との交流から短期留学・長期留学への各段階について、本学が提供する多様な制度やオプションを紹介し、留学のイメージを明示した。次に留学に必要なスキル・資金・心構えなどを挙げつつ、その中でも特に重要な英語力に関して、高校時代から準備すべきことや4技能の必要性に加えて、TOEFLやIELTSの試験内容にも言及した。

さらに日常的に自然な英語に触れる必要があるため、NPR (National Public Radio) ・ BBC (British Broadcasting Corporation) や洋楽を聞いたり、英字新聞を読んだりすることを推奨した。最後に、本学が設置している国際副専攻コースとグローバル人材育成入試 (総合型選抜) の概要を紹介した。

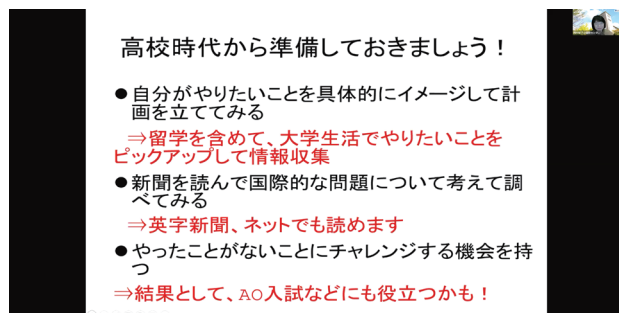


図4 留学講演の様子 (大学で留学をするために～高校での英語学習～)

4.3 留学促進チーム (SIPS) の学生などによる留学体験の紹介

この留学紹介では、7月24日・8月22日のいずれも、欧米諸国に留学経験を有する修士院生2名と学部生2名が、現地での体験や感想を各5分で説明した。それぞれの学生が、アメリカ・イギリス・オーストラリア・オランダ・カナダ・リトアニアの各国に留学した目的や経緯を皮切りに、実際に現地の大学での講義や都市での生活を通じて会得した様々な知見や認識を披露した。全ての学生が留学に挑戦する意欲と異文化社会に触れる意義を強調しており、たとえ外国語が流暢に話せなくても、積極的に意思疎通を図り、臆せず行動する重要性を説いた。1人当たりの持ち時間が短かったため、説明がやや駆け足となった点は否めないが、6カ国のバリエーションがあり、それぞれ期間や専攻も異なったため、留学が実に多様なものであることは参加者に伝わったと思われる。

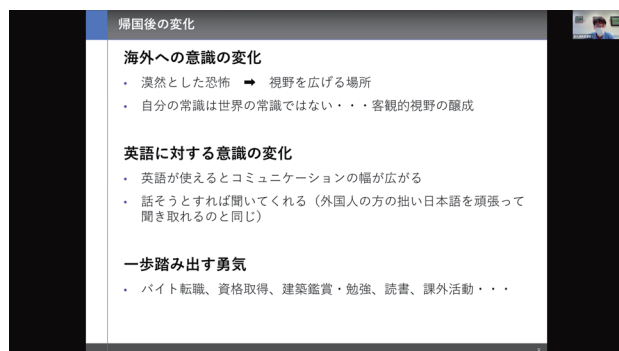


図5 海外留学の経験者による体験紹介の様子

4.4 フリートーク (+Q&A の質問への回答)

このフリートークでは、前節の探究学習編と同様に、Zoom Webinar の Q&A 機能を利用し、参加者からその場で質問を受け付け、学生パネリストがそれに回答する形式を採用した。海外留学編では探究学習編より参加者が少数で、前半は参加者から質問が出なかったため、ファシリテーターが当初から用意していた質問をパネリストに投げかけ、後半に参加者からの質問に移った。参加者からの質問は、①留学先でのトラブルに関するもの、②スコア取得のための英語学習に関するもの、③留学先での受講講座の単位認定に関するものが多かった。またこの質疑応答の過程で、④本学が支給する留学生向けの奨学金についても、パネリストから言及があった。2回合計でも参加者からの質問は9件に留まったため、定刻からの延長は限定的であったが、ファシリテーターへの負荷は重かった。

5 特別講演の意義と課題

5.1 オンライン方式のメリット

本講演は新型コロナウイルスの感染拡大のため、全面オンライン方式での実施となったが、それによって享受できたメリットも存在した。まず遠隔地 (東京都・神奈川県以外) からの参加者が、アンケート回答者全体の 37.5% (21名/56名) を占めていた点が挙げられる。実際に第5波の最中に対面方式で実施した場合、近接地 (東京都・神奈川県) からの参加者も減少したことが予想されるため、オンライン方式となって初めて参加可能となった生徒が、相当いたと推測される。他にも、フリートーク中の Q&A 機能を用いたパネリストへの質問が比較的多く寄せられ、インタラクティブなやり取りが盛んに行われた点も指摘できる。対面方式で実施した場合、多くの参加者の前で挙手して発言することは、高校生にはハードルが高いため、質問はもっと少なかったと思われる。

5.2 事前の準備に関する課題

事前の準備に関する課題としては、参加者募集の広報活動に関して周知期間がやや短かったため、特に7月24日の参加者が少数に留まった点が挙げられる。協定校への周知は1カ月前、高大連携室の Twitter や HP での告知は3週間前であり、既に本学や高大連携室の存在を認識していた生徒には、本講演の開催通知は比較的早く届いていた。その一方で、協定校以外や遠隔地の高校生が本講演の開催を知り得たのは、大学公式の HP や Twitter で告知が実施された後の可能性が高い。実際にアンケート回答者全体の 69.6%

(39名/56名)が、本学の公式HPで開催を知ったと回答している。開催時期が1カ月遅かった8月22日に多くの参加者が集まったのは、周知期間が長く、7月24日に参加できなかった生徒が参加したためと考えられ、2回実施に意義があったことが窺える。

5.3 当日の実施に関する課題

当日の実施に関する課題としては、7月24日の学生講演・フリートーク用のパソコン(PC③)で、一時的な接続不良がたびたび発生した事案が挙げられる。いずれも直後に復旧したため、大きな問題には発展しなかったが、その都度映像と音声が届いてしまい、進行がしばしば停滞した。そのため、8月22日には高性能のパソコンを準備すると共に、配信会場にある4台のパソコンが接続するWi-Fiを分散することで、トラブル発生を回避できた。これ以外にも、探究学習編のプログラムにおいて、フリートーク中に寄せられた質問が予想外に多かったため、定刻より10~20分の延長が発生したことが指摘できる。これはやむを得ない状況であり、十分に双方向のやり取りが尽くされた点では好ましいと言えるが、当初より開催時間をもっと長めに設定すべきだったかもしれない。

5.4 事後アンケートの検証結果

本講演では、各プログラムの終了後にMicrosoft Formsを利用して、参加者に事後アンケートを取っており、参加者全体の43.8%(56名/128名)から回答を得た。まず満足度に関して、5段階で4以上の評価を付けた回答者は全体の87.5%(49名/56名)に及んでおり、本講演に対して参加者が概ね満足したことが分かる。また今後のオンラインイベントへの参加希望度に関しても、5段階で4以上の評価を付けた回答者が全体の92.8%(52名/56名)を占めており、次回以降への期待の高さが窺える⁸⁾。

本講演によって大学に向けての学習意欲と進路意識は向上したかという問いに関しても、5段階で4以上の評価を付けた回答者が、それぞれ全体の85.7%(48名/56名)と89.3%(50名/56名)に及んでいる。さらに自由回答にも、本講演が高校生の苦手意識の克服や大学進学意欲向上に貢献できたことと窺える記述があり、高校生の興味や関心を引き出すという当初の目的は、達成できたものと思われる⁹⁾。また本講演は高大連携活動の一環として実施したため、本学自体の広報活動に直結する内容は、あえてプログラム内に含めなかった。しかし、フリートーク中のQ&Aや事後アンケート結果でも、大学・授業・学生生活の状

況を詳しく知りたいという要望が多く、もう少し本学のアピールを含めても良いと感じた¹⁰⁾。

6 おわりに

6.1 ハイブリッド方式の模索

前節でも言及したように、オンライン方式には対面方式よりも、遠隔地の高校生が参加しやすかったり、発言をしやすかったりするという利点が見られる。しかし近接地の高校生にとっては、実際に会場に訪れて臨場感を味わったり、キャンパスの空気を実感できたりする点で、対面方式にもメリットがある。今後は対面方式が必須でない場合、オンライン方式かハイブリッド方式(特に対面方式のイベントをオンラインで同時配信するハイフレックス方式)を採用することが、通例となることが予測される。現実的には対面会場の収容限界があるため、実現に多くの困難を伴うが、対面方式とオンライン方式を当日も自由に選択できる、柔軟なハイフレックス方式を採用すれば、さらに参加者数を増やすことができるはずである。

6.2 ポストコロナ期の高大連携

新型コロナウイルスの感染状況が収束し、ポストコロナ期が到来した後も、ハイブリッド方式を含むオンライン方式は、高大連携活動の主流として残ると想定される。これによって、高校生は地理的条件に拘束されず、多様な大学のプログラムを受講することができるようになるため、高大連携活動は新たな段階に入ると見込まれる。このようなポストコロナ期と共に、新教育課程の導入期を迎えると、本講演で扱った探究学習や海外留学の需要が高まり、大学の役割はますます大きくなるであろう。今後は高校側の増加していく需要に対応するため、大学側の限られた資源をいかに効率的に供給していくのかが、重要な課題となるはずである。その際には、オンライン方式やハイブリッド方式でのイベント実施が、地域間における需給不均衡を是正するための鍵になることが期待される。

注

- 1) 大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—(答申)」平成10年10月26日。
- 2) 中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」平成11年12月16日。
- 3) 7月24日は午前(11:00~12:30)に探究学習編、午後(15:00~16:30)に海外留学編を実施したが、逆に8月22

日は午前（11:00～12:30）に海外留学編，午後（15:00～16:30）に探究学習編を実施した。

- 4) Zoom Webinar には、イベント関係者のパネリスト追加や、参加者から質問を受け付ける Q&A 機能など、通常の Zoom には存在しない固有機能があるため、事前に会場で複数回のリハーサルを実施し、当日の事故を防止した。
- 5) 本稿で言及する「大学院生スタッフ」とは、本学高大連携室に学生スタッフとして所属する大学院生であり、キャンパス訪問への対応や探究学習支援に従事している。2021 年度には博士課程 3 名・修士課程 14 名が所属していた。
- 6) 学外サイトでの告知例としては、7 月 24 日の告知として ICT 教育ニュース（7 月 16 日）が、8 月 22 日の告知としてスタディサプリ・進路（8 月 11 日）が挙げられる。
ICT 教育ニュース：<https://ict-enews.net/2021/07/16tmu/>
（最終閲覧日：2022 年 8 月 25 日）
スタディサプリ・進路：<https://shingakunet.com/gakko/SC004737/openCampus/archive/0000577898/>（最終閲覧日：2022 年 8 月 25 日）
- 7) 遠隔地からの参加者 21 名の内訳は、北海道・東北が 3 名、東京・神奈川以外の関東が 12 名、中部・甲信越が 4 名、関西以西が 2 名となっており、関東以外の参加者は 9 名（アンケート回答者の 16.1%）であった。
- 8) 実際に本学では、2022 年度大学説明会（オープンキャンパス）を 7 月 17 日と 9 月 18 日に開催した際、教員による特別講演と大学院生によるリケジョトークイベントをハイブリッド方式で実施し、のべ 162 名の参加者を得た。
- 9) 探究学習と海外留学について、アンケートに記述された参加者の自由回答をそれぞれ 1 件ずつ取り上げ、以下にその一部を抜粋する。「漠然と防災や地理に興味があり、課題研究でもそのようなことを調べていたのですが、分野が広すぎてどうすればいいか迷っていました。でも資料のまとめ方や結論への導き方など、全体像を見渡す方法を教えていただき、研究が進めやすくなりました。院生の方のお話もとても興味深く、自分が数年後にこれだけ専門的なことをできるようになっているかもしれないと思うとワクワクして、普段の勉強をもっと頑張ろうと思いました。」「留学について多くの事が学べて、大学で留学してみたい気持ちが高まりました。今までに実際に外国へ留学した人の話を聞く機会があまり無かったので、留学に対するイメージが講演前よりハッキリしたし、身近なものに感じられました。」（原文ママ）
- 10) 今後に参加したい講演のテーマについて、アンケートで複数回答の形式で尋ねた所、大学生の生活紹介が 64.3%（36 名/56 名），大学での授業紹介が 80.4%（45 名/56 名），東京都立大学の大学紹介が 60.7%（34 名/56 名）であった。アンケートの項目としては直接尋ねてはいないものの、本学志望の参加者が多かったことが窺える。

謝辞

本講演の準備・実施に際して、本学高大連携室の大学院生スタッフより多大な助力を得た。今回はオンライン方式を採用したため、若い学生諸君の IT スキルがなければ、運営は困難だったと思われる。また講演担当の院生スタッフと SIPS の学部生の皆さんも、自身の貴重な経験を惜しみなく高校生に伝えてくれた。この場を借りて、深く謝意を表したい。

参考文献

- 雨森聡 (2022). 「コロナ禍で変わる入試広報：静岡大学全学入試センターの実践」『大学入試研究ジャーナル』 **32**, 251-257.
- 一之瀬博・木村建・海尻賢二・平井佑樹 (2022). 「コロナ禍における信州大学アドミッションセンターの入試広報活動」『大学入試研究ジャーナル』 **32**, 150-156.
- 勝野頼彦 (2004). 『高大連携とは何か—高校教育から見た現状・課題・展望』学事出版.
- 久保沙織・南紅玉・樫田豪利・宮本友弘 (2021a). 「オンラインによる高校教員向け入試説明会の実践と評価」『大学入試研究ジャーナル』 **31**, 394-400.
- 久保沙織・南紅玉・樫田豪利・宮本友弘 (2021b). 「オンラインによる入試広報の展開—『オンライン進学説明会・相談会』の実践を通して—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』 **7**, 57-65.
- 久保沙織・宮本友弘 (2021). 「オンラインによる個別入試相談会の実践と課題」『教育情報学研究』 **20**, 75-84.
- 倉元直樹・宮本友弘・久保沙織・南紅玉 (2020). 「東北大学における入試広報活動の「これまで」と「これから」—頂点への軌跡からオンライン展開への挑戦へ—」『教育情報学研究』 **19**, 55-69.
- 前川直哉 (2019). 「福島県における高校生のサービス・ラーニングと高大連携としての「社会貢献活動コンテスト」」『大学入試研究ジャーナル』 **29**, 200-203.
- 永田純一・三好登・杉原敏彦・竹内正興 (2022). 「オンライン入試広報活動の課題と展望：広島大学を事例に」『大学入試研究ジャーナル』 **32**, 265-270.
- 永田純一・高地秀明・杉原敏彦 (2015). 「ハワイ州における高大連携プログラム」『大学入試研究ジャーナル』 **25**, 123-128.
- 西郡大・竜田徹・山内一祥・福井寿雄・高森裕美子・園田泰正・兒玉浩明 (2018). 「継続・育成型高大連携活動カリキュラムの開発と実施—完成年度を迎えた「教師へのとびら」の効果と課題—」『大学入試研究ジャーナル』 **28**, 147-153.
- 大久保貢 (2021). 「工学部における高大連携活動を通じた高大接続改革への基盤づくり—AO入試導入後、17年間の取り

組み——」『大学入試研究ジャーナル』**31**, 319–325.

大野真理子・河西奈保子・溝口侑 (2021). 「高大連携活動が高校生に与える影響について——「都立高校生のための先端研究フォーラム」の事例をもとに——」『大学入試研究ジャーナル』**31**, 49–55.

高崎経済大学産業研究所編 (2013). 『高大連携と能力形成』日本経済評論社.

吉田章人・並川努・坂本信 (2022). 「コロナ禍における新潟大学の入試広報の実践：『オンライン個別相談会』を中心に」『大学入試研究ジャーナル』**32**, 143–149.